

南アルバータ日系人社会の生成と発展（上）

——BC州日系人社会との比較研究——

村井忠政

はじめに

1. 本研究の目的と意義

一時期（1910年代～1940年代前半）ブリティッシュ・コロンビア州（以下BC州と略記）に次いでカナダ第2位の日系人人口集中地域であったにもかかわらず、アルバータ州の日系人社会はヴァンクーヴァーやトロントのそれと比べると、これまで研究者の関心をあまり惹くことがなかった。このため、筆者の知る限りアルバータの日系人社会に関する本格的な研究は、わが国においてはいまだなされていないというのが現状である。この原因としては、南アルバータの日系人社会の人口規模が比較的小さく、しかもBC州のそのように都市部に集中して日本人街を形成することもなく、南アルバータの農村地域に散在していたことがまずあげられるだろう。カルガリーやレスブリッジのような南アルバータの中核的な商業都市に日系人が集中し始めたのは第二次大戦後になってからであった。¹

たしかに、アルバータ州において日系人人口の占める比率は一貫してとるに足らないものであったといえる。しかしながら、アルバータ州、とりわけ南アルバータの日系人がこの地域の経済的・社会的発展に無視することのできない重要な貢献をしたことも事実である。さらに、南アルバータにかなり早い時期から日系人が定住していたことが、1942年にBC州の日系人がカナダ政府の強制移住命令によって太平洋沿岸からロッキー山脈を超えて内陸部のアルバータに移動・定住する際に、大きな支えになったことはまちがいない。およそ2,600名の日系人がアルバータ州の甜菜（砂糖大根）栽培プロジェクトに送り込まれ、これによってアルバータの日系人人口は飛躍的に増加している。²

周知のようにBC州においては日系人に対するさまざまな形での差別が根強く存在したが、アルバータにおいてはこのような差別（少なくとも法的規制という形での）は見られなかった。アルバータの日系人たちは、選挙権、公的な職務（州政府や地方自治体政府の職員、公立学校の教員）、兵役等に関してもいかなる法的規制（制限）をも受けていなかったのである。BC州とアルバータ州の日系人社会を取り巻いていたこのような社会的状況のちがいが何に起因するものなのかを、両者を比較することによって明らかにすることが、本稿の目的の一つである。³

2. 時期区分について

以下の記述において南アルバータにおける日系人社会の生成・発展の軌跡を辿りつつ、そこで

日系人たちがいかにホスト社会に適応・同化していったかを明らかにしたい。説明の便宜上、南アルバータの日系人社会をその発展段階に応じて次の4つの時期に区分する。この時期区分に用いられた基準はあくまでも便宜的なものであるが、南アルバータにおける日系人の地位の変動に最も決定的な影響を及ぼしたと思われる事件を考慮して時期区分を設定したことをあらかじめ断っておきたい。

第一段階の「生成期」は1905年から1914年までの10年間である。1905年という年は、たまたまアルバータが州に昇格した年に当たるが、日系人が南アルバータに恒常的に定住し始めたのは、ちょうどこの頃であった。ヴァンクーヴァーを中心とするブリティッシュ・コロンビア州太平洋沿岸部の日系人社会が、生成期から発展期に入ったのが1908年頃であるから、それとの比較で見るとかなりのタイムラグが見られる。⁴

1914年は第一次世界大戦が勃発した年であるが、レイモンドのみならず、南アルバータ在住の日系人の互助組織としてもっとも重要な役割を果たした「レイモンド日本人協会」(Raymond Japanese Society)が組織されたのもこの年であった。いうまでもなく日本人会の結成は、日系人のカナダ社会への適応・同化という視点から見ると、とりわけ大きな意義をもつ出来事であった。また、第一次世界大戦において日本はカナダとは同盟関係にあり、カナダ在住の日系人の多くが義勇兵としてヨーロッパ戦線で戦ったこともあって、この戦争を契機に日系人にたいする白人の態度に変化が見られたことに注目したい。⁵

第二段階の「発展期」は1915年から1941年までの27年間である。この時期の前半(1915年-1928年)は南アルバータの日系人にとって相対的に恵まれた時代であったといえる。南アルバータの日系人たちが、それ以前の「出稼ぎ者意識」から脱却して、日系人としてのアイデンティティを保持しつつも、積極的にカナダ社会に定着するための努力を始めたのがこの時期であった。

「発展期」の後半(1929年-1941年)はニューヨーク・ウォール街の株式市場における株価の暴落に端を発した世界恐慌勃発の年(1929年)に始まるが、たまたまこの年に「レイモンド仏教会」(Raymond Buddhist Church)が設立されている。仏教会の僧侶(開教使)たちが南アルバータの日系人社会で果たした役割はきわめて大きなものがあった。彼らは日系人にとって文字通り精神的・文化的指導者であったし、彼らが二世たちの日本語教育に果たした役割も無視できない。

第三段階の「戦中期」は1942年から1948年の7年間である。ここでいう「戦中期」は第二次世界大戦ないし太平洋戦争の期間とは一致しない。1941年12月7日(現地時間)の真珠湾攻撃は、当時カナダに在住していたおよそ23,000人の日系人(その大部分がBC州に在住)のその後の運命を大きく変えずにはおかなかった。太平洋戦争の勃発の翌年、カナダ連邦政府によって日系人に対する強制移住命令が出されたことにより、BC州にいた日系人のうちおよそ2,600人弱がアルバータ州の甜菜栽培農場に送り込まれた。これによって、1941年の国勢調査ではアルバータ州の日系人人口は578人に過ぎなかったのが、わずか1年後の1942年7月1日には3,160人に激増している。⁶

太平洋戦争勃発の翌年から始まるこの7年間は戦時措置法(War Measures Act)によって日系

カナダ人が市民としての権利を剥奪されていた期間である。この時期は日系カナダ人にとって忘れることのできない「哀しみと恥辱の年月」(Years of Sorrow and Shame)⁷であった。いうまでもなく、太平洋戦争中の日系人の生活は、それ以前と大きく異なるものになった。連邦政府による財産没収、内陸部への強制移住、忠誠心調査と日本への送還、そしてなによりも強制収容所内での悲惨な生活が日系人の心に残した傷は測り知れないものがある。⁸

南アルバータの日系人は、太平洋沿岸部のそれに比べると、地域社会への適応・同化がはるかにスムーズに進んでいたために、南アルバータではBC州で見られたような激しい排日感情や日系人排斥運動は生まれなかった。とはいえ、日系人を見る目に微妙な変化の兆しが出始めたことも事実である。同地域の日系人たちは、カナダへの忠誠心を積極的に示すことによって、白人社会の信頼を勝ちとる道を選んだのである。

最後の第四段階の「戦後期」は1949年から現在までである。戦後、日系カナダ人の社会的地位は戦前のそれとは比較にならないほど向上している。この原因としては次のいくつかの理由が考えられる。

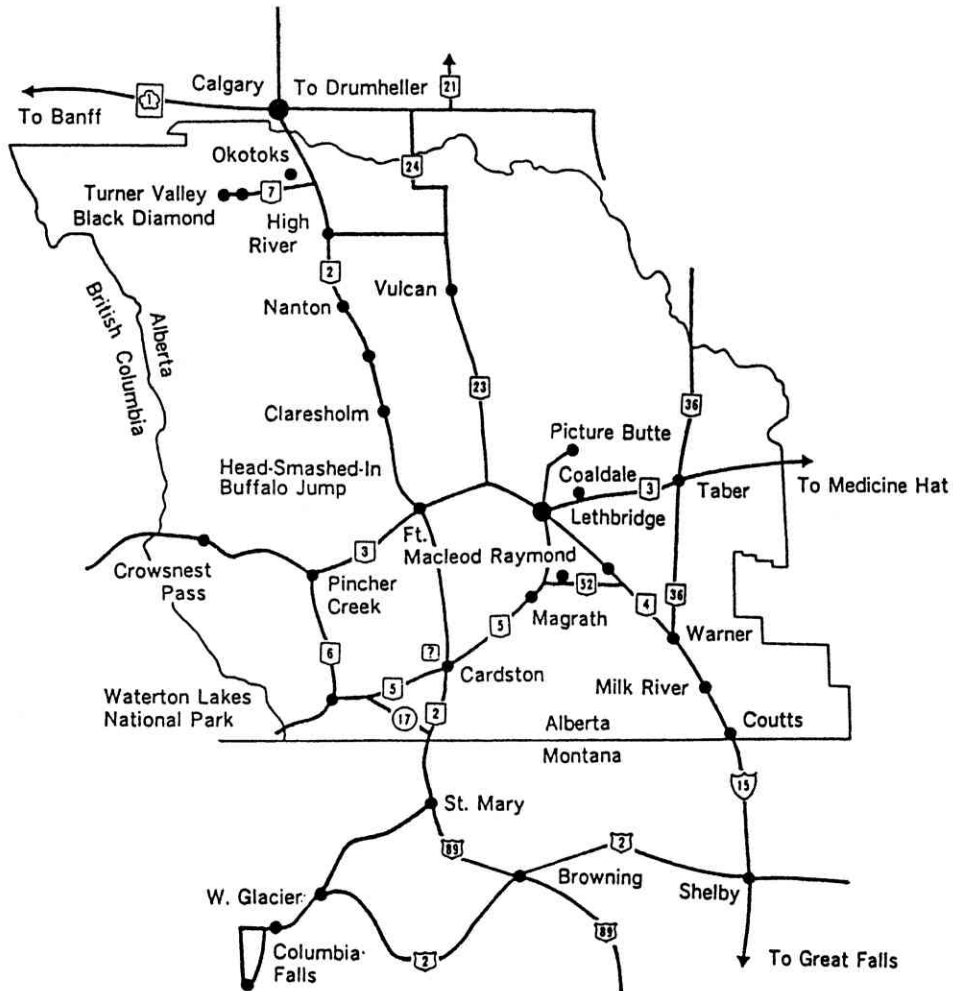
第一に、連邦政府が日系人に対して「散在政策」を実施したため、日系人は戦前のようにBC州に集中せず、カナダ全土に広く分布するようになった。また、各都市でも、戦前の日本人街のように日系人だけで固まって住まず、広く散らばって住むようになった。南アルバータの日系人たちも、戦後、エドモントン、ヴァンクーヴァー、モントリオール、トロントなどの大都市へ次第に流出している。それでも南アルバータに点在する町々には、日系社会が依然として存続している。現在南アルバータで最大の日系人を抱えるのがレスブリッジであり、同市の日系人の人口は三世を含めておよそ5,000人といわれる。同市には2つの仏教会（「仏教会」と「本派仏教会」）と隣組（日系人の社交クラブ）があり、驚くほど立派な日本庭園（「日加友好庭園」）がある。このほかにも、カルガリー、テーバー、レイモンド、コールデール、ピクチャー・ビュートなどにもかなりの数の日系人が居住している。

第二に、日系二世、三世は戦前の一世のように、限られた職種ではなく、広い分野の職業に就くようになった。これは一世が子どもの教育に力を入れたため、二世、三世には高学歴の者が多いことに起因している。二世、三世の間には弁護士、医師、大学教授などの専門職や管理職従事者の比率がヴィジブル・マイノリティ（非白人マイノリティ）の中で最も高く、日系人の社会的地位を押し上げた最大の要因となっている。また、失業率で見ても、日系人はヴィジブル・マイノリティの中で最も低く、1991年の国勢調査では6パーセントとなっている。

第三に、二世、三世のあいだでは他のエスニック・グループに属する人々と結婚する交婚(inter-marriage)が増えた。ほとんどの都市で交婚率は80パーセントを超えており、中国や韓国などの他のアジア系に比べると、はるかに高い交婚率を示している。これは日系人の同化が予想以上に急速に進んだことを意味している。交婚率の増加は日系人のエスニック・アイデンティティを希薄化する方向に作用するものと予想されたが、現実には自分のエスニック・アイデンティティを日系とする人々の割合は増えている。

第四に、1960年代から「新移民」(New Immigrants)が日本から到着しはじめた。彼らの多くは高学歴で高度の専門知識や技術を持ち、意識面でも戦前の日系人のそれとは大きく異なる特徴を持つ。また、戦後高度経済成長を遂げた日本が「経済大国」となったことで、カナダにおける日系人に対する評価も戦前とは比較にならないほど好転している。さらに、1988年、カナダ連邦政府が戦時中の日系人に対する強制収容などに代表される不当な扱いを謝罪し、生存者に対する補償 (Redress) がなされた。これにより日系人の市民権は完全に回復され、その社会的地位も戦前とは比較にならないほど向上したといえよう。

紙幅の関係で、本稿では第一段階の「生成期」、第二段階の「発展期」の前半 (1914年－1928年) までを取り上げるにとどめ、「発展期」の後半 (1929年－1941年)、第三段階「戦中期」、第四段階「戦後期」については、次号に譲ることにする。



南アルバータのコミュニティ

I 生 成 期

1. 日系人来住の時期とその出身地

南アルバータに最初の日系人（記録に残っている限りでの）が到着したのは、1905年であった。⁹ 日系人が集団で本格的に南アルバータに定着するに当たって決定的な要因として作用したのは、同地域のビート栽培農場の耕作労働者が絶対的かつ恒常的に不足していたことと、日系人にこの労働に対する適性があったこと、これら二つの事実であった。1903年にアメリカ合衆国のユタ州出身のモルモン教徒レイモンド・ナイト（Raymond Knight）がレイモンドに「ナイト製糖会社」（Knight Sugar Company）を設立し操業を開始したが、最大の問題はいかにして安価で良質の労働力を確保するかにあった。当時の西部カナダにおける労働力不足はほぼ慢性的といってもよい状態にあったし、甜菜栽培農場のほかに、鉄道建設、鉱山などで労働力不足は深刻なものがあつた。したがって、なによりも経済的要因、すなわち全般的な労働力不足からくる日系人労働力にたいする需要の高まりが、日系人の南アルバータへの移住を促進した最大の要因であったといえる。すでに述べたように、当初ナイト製糖会社は、1903年にBC州から中国人労働者を連れてきたが、彼らは甜菜栽培の仕事には向かなかつたため、次に日本人が連れてこられたという経緯がある。¹⁰

レイモンドの日系人はその来住の時期によって次の三つのグループに分けられる。第一のグループは、1904年に、甜菜耕作労働者としてBC州から入植した105名のの人たちであり、アメリカで上院議員を勤めたS・Y・ハヤカワの父親早川一郎が、「日加用達会社」（Canadian-Nippon Supply Company）を通して連れて来たものである。第二のグループは1920年頃の炭鉱労働者たちと農夫呼び寄せで来た人たちである。第三のグループは、第二次大戦中の強制移動でBC州から移住して来た人たちである。¹¹ ちなみにレイモンドの日系人のあいだでは、レイモンドに戦前から住んでいる先発の移住者を「先住者」（old-timers）と呼び、戦争中にBC州から強制移動で移住してきた後発の移住者を「新住者」（new-comers）と呼んで区別していた。

南アルバータの日系移民たちは、日本のどの地域から来ているのだろうか。そこには他の地域と異なる際だった特徴が見られるだろうか。この疑問に答える前に、日本からアメリカおよびカナダへの移住者の出身地について一般的な特徴をみてみることにしよう。

1899年から1903年までの5年間に発行されたパスポートを調査した吉田弥三郎（アメリカ合衆国ウィスコンシン大学教授）によれば、わが国から海外（中国、韓国を除く）への移民は日本のほぼすべての県から来ているが、西日本に偏っていることが明らかである。また東北地方では福島と宮城の出身者が多いことが目立つ。¹²

次に、わが国からカナダへの移民に限定すると、1920年の国勢調査で出身地別の日系カナダ人の数字を見ると、滋賀、和歌山、広島が圧倒的多数を占め、熊本、福岡、鹿児島がこれに次いでいる。東日本では宮城と福島が多いくらいで、やはり西日本に偏っていることが読み取れる。¹³

さらにレイモンド在留の日系人に限定すると、『加奈陀之寶庫』によれば、1918年の時点でのレ

イモンド在住の日系人の出身地は17の府県にまたがっており、なかでも沖縄、鹿児島、広島など西日本出身者が多数を占めている。¹⁴ 南アルバータにおいて沖縄出身者が取り分け目に立つのは、ハーデヴィルを始めとする炭鉱街に沖縄出身者が集団で入植しているためであろう。

最後に、デービッド・イワササによれば、彼自身がインタビューしたレイモンドの日系人の出身地は、山口、福岡、広島、長野、滋賀、愛媛、鹿児島、三重、岡山、鳥取、東京、沖縄であり、やはり圧倒的に西日本に偏っていることがわかった。¹⁵

次に、南アルバータ日系移民の移住の軌跡を辿ってみよう。南アルバータへ移住してきた日系人の場合、最初から南アルバータを移住先として選択したものは極めてまれであり、カナダの他の地域（とりわけBC州）もしくはアメリカから再移住して南アルバータに定住したものが大多数を占めている。BC州からの移住者は、そこでの日系人に対する排斥運動の高まりに嫌気がさしたり、一獲千金を夢見てカナダに移民してきたにもかかわらず、そこでの仕事が思ったほど金にはならないことに失望して、新しい仕事を求めてアルバータに再移住してきた者たちであった。しかしこれら後発の来住者の多くは、結局長くは滞在せず、再びBC州へもどったり、アメリカ合衆国へ転出したりしている。アメリカ合衆国からの移住者はユタ州やアイダホ州出身者が多数を占めていた。これは南アルバータにはモルモン教徒が多く、ユタ州ソールト・レイクを本拠地とするモルモン教徒が日系人の移住を媒介したためと推定される。

2. 南アルバータ移住の動機

ここで、これら日系人が南アルバータへの移住を決意した動機はいかなるものであったのかについて考察してみよう。一般的にいった人々を移民へと駆り立てる「押し出し要因」（プッシュ要因）としては、経済的要因がまずあげられる。わが国から戦前にアメリカへ移民した人々の動機の大部分がこの経済的要因によるものであった。¹⁶

明治以降、西洋列強に遅れて近代化を推進し始めた日本は、日清戦争、日露戦争における勝利に酔いしれて、欧米諸国と同じ帝国主義への道を歩み始めた。「富国強兵」「殖産興業」をスローガンに掲げた明治政府にとって、国内では人口の激増を歓迎し、余剰人口を海外に送り出すという、いわゆる「植民政策」を採っていた。ただし、わが国の場合、欧米諸国のような本格的な植民政策というよりは、移民の名を借りた「出稼ぎ労働」というのが実態に近かった。当時の貧しい日本にとって、海外の出稼ぎ移民が本国に仕送りする金は、貴重な外貨だったのである。

「生めよ、増やせよ」の人口増加政策による急激な人口増加に食糧生産が追いつかず、農村部を中心に慢性的な食糧不足が見られ、農民（とりわけ次男、三男）はそこにとどまるかぎり窮乏生活から抜け出すことができないという構造になっていた。¹⁷ 当時の日本の農村における小作人の生活は、いまでは想像もつかないほど貧しいものであった。年に一、二度、盆と正月に、塩辛い魚を口にする程度で、朝早くから夜遅くまで働きづめであった。このような絶望的な経済的困窮から脱出できる恐らく唯一の道として残されていたのが海外、とりわけアメリカ、カナダへの移住という手段であった。

南アルバータの日系人たちの場合も、金銭的な動機が彼らを移住へ駆り立てた主たる要因であった。この他に、知的探求心や徴兵逃れなども、わずかではあるが移民の動機としてあげられている。彼らのなかでカナダや南アルバータについての知識をわずかでも持っていた者はほとんどいなかった。彼らが知っていた情報といえば、ただそこでは賃金が高く、一生懸命働けば金持ちになれるといった程度の知識にとどまっていたのである。彼らの多くはカナダとアメリカ合衆国との区別さえつかず、おそらく両者を同一視していたと思われる。1907年以降、日系人がアメリカ本土（ハワイを除く）へ渡航することは極めて困難になったために、万が一合衆国への入国を拒否されても、ひとまず北米大陸のカナダに入ってしまうと、将来アメリカ合衆国へ再移住する道も開けるだろうと考えていた者が多かったと思われる。

彼らにとって移民の第一の目的は、お金をため、帰国して、日本で少しでもいい暮らしがしたい、故郷に錦を飾りたいという夢の実現であった。20世紀の初めにアメリカへ渡った人々の多くが口にした目標額は1,000ドルであったという。これは当時の日本円に換算すると2,000円であり、それだけあれば、当時の日本では一生暮らしていけるだけの田畑が買えて、大きな家が建てられたという。ここに見られるのは、まさに「出稼ぎ者意識」以外のなにものでもない。¹⁸

南アルバータの日系人移民の場合も、彼らを移民へ動機づけた主たる要因は、経済的なものであったということができよう。しかし、ここで興味ある事実が明らかになった。すなわち、南アルバータの先発移住者の多くは、実は貧農の出身ではなく、むしろ中農の出身であったという事実がそれである。なかにはかなり裕福な農家の出身者もいたし、高い教育を受けた女性さえいたのである。デービッド・イワアサがインタビューした日系一世のうち、絶望的な経済的困窮から逃れるためにカナダへ来たという者は一人もいなかったという。このように、南アルバータの日系人移民の間に貧窮層出身者が少なかったという事実は、どのように説明したらよいのだろうか。これには次の二つの原因が考えられる。

第一に、アメリカやカナダへの移住にはかなりの経済的・金銭的負担が必要であった。渡航費（船賃・汽車賃）、仲介業者に支払う手数料、当座の生活費、その他の雑費を用意できるだけ経済的余裕がなければ、渡航はできない。その日、その日の暮らしに追われているような者にはとてもこれだけの費用を工面することはできなかったであろう。

第二に、現状に甘んずることなく、まったく未知の世界で新たな生活を開拓していくためには、かなりの能動的・積極的な意欲（アスピレーション）とエネルギーが要求される。これらの積極性やエネルギーが生まれてくるためには、ある程度以上の経済的・社会的・文化的快適さを経験していることが必要とされるのである。

知的的好奇心・旺盛な好学心あるいは向上心などは、南アルバータの日系一世、特に女性の間に顕著に見られる特質であるといえる。筆者がインタビューしたマツヨ・モリヤマの母親、高橋（旧姓島田）マンの場合、まさにこの典型的な事例といっても過言ではない。ある時モリヤマさんが筆者に語ってくれたことであるが、彼女の母親が生前口癖のように言っていたことがあるという。それは「人間にとって一番大切なのは学問である。どんなに苦しくても学問だけは続けな

ければいけない」というものであった。まさにモリヤマさんは、この母親の言葉を遺言として、それを忠実に守り実行したのである。¹⁹

以上の考察から、つぎのような結論が導かれる。日系移民をカナダ移住へ動機づけた主たる要因（プッシュ要因）は、母国日本の郷里における経済的困窮からの逃避というよりは、生活水準や社会的地位の上昇への希求ないしアスピレーションであったと考えるべきである。²⁰ 経済的要因以外のプッシュ要因としては、当時の日本政府が外国への移民を積極的に奨励していたことがあげられる。日本からの移民が急激に増加するのは今世紀にはいつてからで、特に最初の10年間である。日本から移民として出国した人々のほとんどが農村地帯の出身者で占められていたことは周知の事実である。明治期の急激な近代化政策（「富国強兵」「殖産興業」などのスローガンに象徴される）によって生じた農村地帯の経済的疲弊を解決するための一手段として、明治政府は外国への「出稼ぎ」ともいべき移民を政策として奨励したのである。

これまでわれわれは、南アルバータの日系移民を移住へと駆り立てた要因、すなわち「押し出し要因」（プッシュ要因）について検討してきたが、次に彼らを引きつけた要因、すなわち「引き込み要因」（プル要因）について考察してみよう。

およそ20名におよぶ南アルバータ在住の日系一世にたいするイワアサのインタビューから明らかになったことは、南アルバータの日系移民の大多数は、すでにBC州に定住していた「先発移民」の親族や知人であり、その「先発移民」のもたらす貴重な情報や伝を頼って、カナダに移住してきたいわば「後発移民」であったという事実である。²¹

もう一つの見逃すことのできない重要な要因としては、労働者斡旋業者「日加用達会社」（Canadian Nippon Supply Company）の存在をあげないわけにはいかない。後に詳しく述べるように、この会社は1906年に後藤左織とフレデリック・ヨニー（Frederick Yonhy）によって創設されたもので、日系人労働力の供給に関して雇用主のCPR（カナダ太平洋鉄道）との間に独占的な契約を取り交わしていた。

以上の検討を要約すると、日本本国における経済的困窮、農村部における人口増加の圧力、日本政府の植民政策などがプッシュ要因として作用し、先発移民（とりわけ家族・親戚・知人）の情報や移民先の受入れ体制などがプル要因として作用し、これらの客観的な諸要因と主体的諸要因（アスピレーション、向上心、冒険心など）が複雑に絡み合って、人々を移住へと動機づけたものといえよう。²²

3. 写真結婚について

わが国の移民は、当初から帰化・永住を目的としたものではなく、数年間働いて金を稼いで故郷に帰ることを前提としたいわゆる「出稼ぎ労働移民」ないし「回帰型移民」であったことはすでに述べた。したがって、当然家族ぐるみの移民はきわめてまれで、日本からの移民はそのほとんどが単身男性（その多くは若年の独身男性）によって構成されていた。当時アメリカ合衆国やカナダに在留していた日本人独身男性にとって、現地で結婚相手を見つけることは至難の業であ

り、ほとんど絶望的であったといつてよい。そこで、海外にあって配偶者を探す方法として考えられたのが写真結婚であった。

この写真結婚が最も盛んに行われたのは1910年代であった。これにはカナダ政府の移民政策が深い関わりを有している。1907年、ヴァンクーヴァーで東洋系（中国系・日系）移民排斥を叫ぶ白人暴徒が、中国人街と日本人街を襲い、商店などを破壊するという事件（世に言う「ヴァンクーヴァー暴動」）が起こった。²³ これを受けてカナダ連邦政府は日本政府との間に「紳士協定」を取り決めている。すなわち、日本からカナダへの移民を年間400名に制限するというのがその内容であった。このルミュー協約が成立した1908年頃のカナダ在住の日系移民の数は、8,000人前後であったと推定される。この協定を締結したカナダ連邦政府の意図は、日系移民のこれ以上の増加を抑え、下層白人労働者の不満を鎮めるところにあった。ところが、その後の展開は、カナダ連邦政府の期待をまったく裏切る結果になったのである。²⁴

ルミュー協約は、日本政府がBC州の「排日情勢」を考慮して、自主的にそのカナダ渡航移民にたいする効果的な制限措置をとることを表明し、移民の種類を①再渡航者と、カナダ在住の日本人の妻子、②カナダ在住日本人の家内使用人、③カナダ在住の日本人農業経営者の必要とする契約移民、及び④契約移民とし、さらに②の家内使用人と③の契約移民（農業労働者）については年間400名以内に制限することを約したいいわゆる「紳士協定」である。

この協定の最大の特徴は、第一に、それが日本側による自主規制措置であったという点にあった。すなわち、カナダ連邦政府の許可を要する④の「契約移民」を除いて、他は全て旅券と日本領事発給の在留証明書または呼寄せ証明書によって渡航できる建て前であり、実質的な移民管理権が日本側に属していたのである。第二に、カナダ在住者の妻子は制限数の枠外として、その渡航は原則的に自由であるとの理解の下に運用された。このことは、当然のことながら、BC州内のルミュー協約への不満を増大させる結果につながる。協定が実施された1908年以降、渡航者の8割以上をカナダ在住者の妻子が占め、また写真花嫁も目立つようになり、増加し続けるカナダ在住日系人の95パーセント以上がBC州に集中したからである。

1921年の人口調査によれば、日系人は16,000人弱と、およそ10年間で倍増している。これは一体いかなる事情によるのか。この謎を解く鍵がまさに写真結婚だった。すでに述べたように、日系移民の多くは単身の男性であった。そのうち既婚男子は、日本に残してきた妻子を後からカナダに呼び寄せることができた。もっとも妻子を呼び寄せるまでに要した年数は平均で6年であったというからその間は一入暮らしを強いられるわけである。問題は独身の男子であった。日系移民の多くは、漁業、鉱山、山林、製材、農業などの分野で働く肉体労働者、あるいは、日系移民相手の飲食店や旅館などで働く人々であった。要するに、教育、技術、専門的知識をもたない不熟練肉体労働者がその大半を占めていた。英語も片言しか話せない東洋人独身男性が、白人のカナダ人女性と結婚することは、ほとんど不可能に近い話であった。かといって日本人の未婚女性を結婚相手として現地で探すこともきわめて困難であった。それでは花嫁探しに日本へ行けばいいのではないかと思われるかもしれない。しかし、それにも色々な障害があった。まず日本に行く

には高い船賃がかかる。さらにヴァンクーヴァーと横浜の間の船旅には少なくとも2週間はかかる。さらに日本で見合いをし、式を挙げて、カナダに花嫁と2人で戻ってくるまでには、数ヶ月かかることを覚悟しなければならない。これでは大概の者は配偶者探しを諦めざるをえなかっただろう。かりに経済的に多少のゆとりがあったとしても、もう一つの大きな障害が立ち塞がっていた。1908年以降はルミュー協約によって移民数が制限されているので、カナダ在住者で市民権を持たないものは、いったん日本に行くとカナダに戻れない場合があるのである。

そこで苦肉の策として考えられたのが写真結婚である。これは一言でいえば、写真や手紙を介しての見合い結婚であるが、具体的にはカナダに住む独身の日本人移民の青年が、日本に住む両親が選んだ女性との間で写真や経歴を交換し、互いに相手が気に入れば、手紙のやり取りを行い、両者が合意に達した時点で妻として入籍するというプロセスがとられるのが普通であった。したがって、結婚の当事者同士は一度も直接顔を合わせることなく、婚姻が法的に成立してしまうのである。

当時の白人の目には、当然のことながら、このような結婚の形態はきわめて奇異なものに映ったにちがいない。今日の日本人から見ても、ずいぶん無茶なやり方に思えるが、見合い結婚が当たり前であった当時の日本社会では、さほど違和感や抵抗はなかったのである。こうして日本を後に未だ見ぬ未来の夫に会いに太平洋を越えてカナダに渡って来た日本人女性たちは「写真花嫁」(picture bride) とか「写婚妻」などと呼ばれた。

こうした写真結婚には色々とも問題も多かった。いわば詐欺に似た手口が使われることもあったらしい。例えば、実物以上によく見せるために写真を大幅に修正するとか、実際より若く見せるためにかなり以前の写真を用いるとか、時には本人ではなく好男子の友人の写真を用いるといった乱暴なケースもあった。手紙についても、多くの場合本人が字を書けないので代筆は日常茶飯事であった。さらに、カナダに来てからの履歴を偽ったり、資産の見積りを実際より一桁上げたりする。服装についても、男は山高帽、ネクタイ、フロックコートなどを着て、一見紳士風を装ったりするが、実はそれらはすべて借り着だったりする。²⁵

したがって、写真結婚については、これまで様々な悲劇的側面のみが強調されてきた。しかし、写真結婚には悲劇的なエピソードばかりではなく、順調で幸福な家庭生活にむすびついたケースも少なくない。この辺の事情については、真壁知子著『写真婚の妻たち——カナダ移民の女性史』(未来社、1983年)及び、工藤美代子著『写婚妻』(ドメス出版、1983年)に詳しい。

工藤美代子の『写婚妻』にはレイモンド在住の3人の写婚妻へのインタビューが出てくるが、ここでは岩浅伊都と小谷田イサの話を紹介しよう。ちなみにこの岩浅伊都は、「レイモンド日本人協会」の初代会長を務めた岩浅享淳の夫人であり、またデービッド・イワアサの祖母に当る。彼女はマツヨ・モリヤマの母親、高橋マンと親しかったらしく、マツヨさんの話のなかにもしばしば登場している。

それで、私が10(歳)位の年でした。日本人のひとたちが仏教のお坊さんと呼んで、日本語

を子どもに教えるようにしようってお話が進んでおったのです。そしたら、お母さんとイワサ（岩浅）さんのミセス（夫人）が家へきて、お話しやったのね。ミセス・イワサには子どもが8人おられたのです。²⁶

すでに述べたように、1904年にレイモンドの製糖会社が、甜菜栽培労働者としてBC州から日本人移民を連れてきたが、この製糖会社は1914年、閉鎖される。これに伴いBC州に戻る人も出たが、未開の土地を購入し、小麦や野菜作りの自作農に転向した人々が50名ほどいた。その中に、高橋マンや岩浅伊都とその後結ばれることになったご主人たちがいたのである。写真花嫁としてレイモンドに着いた伊都は、まずあまりに粗末な住居に驚かされる。

そりや初めて主人に会った時は、不細工なので、がっかりしました。主人とは、イトコ同士なんですよ。でも、もちろん会^あうたことはない人です。写真結婚ですから。それで、レイモンドに着いてみたら、家を見てまたがっかりしました。あれ大正4（1915）年の5月ですよ。こちらに来たの。²⁷

もう一人のレイモンドの写婚妻、小谷田イサは明治29（1896）年生まれで、大正6（1917）年にカナダに渡っている。

私は写真結婚ですが、やっぱり親戚からもろうてもらいました。主人は東京の出身だけど、私は滋賀県です。彦根町、今の彦根市ね。昔はビクトリアに船が着いて、きれいな船でした。ほんなにバタバタと揺すれませんか。やんわりとしたもんでした。パパさんは10歳ほど私と違います。36ぐらいでした。ビクトリアに迎えに来てて、はい、すぐ解りました。ちっとも不自由しません。船の中は日本着で、ビクトリアに着いてから着替えました。スカーツにハットかぶってね。パパさんが何かこしらえて持って来たんでしょ。じき身体に合いました。²⁸

マツヨ・モリヤマの両親高橋夫妻も、この写真結婚で結ばれている。その経緯についてマツヨさんは次のように語っている。

お父さんは（お母さんへ）「写真結婚するのにカナダに来たら、まあ、濡れ手に粟と言いますか、そういう風にお金が儲かるから、来たらどうか」という手紙を書いたらしいです。すでにお母さんも2度目の結婚であつたらしいのです、本当は。それで2人の子どもがいたらしいのです。²⁹

マツヨさんの母親もそうであつたが、再婚だったり、家庭の事情で婚期が遅れた女性が写真結婚には多く見られた。また、結婚相手は親戚同士というのがかなりあったと思われる。

レイモンドの日系人のばあい、当初甜菜栽培農場の耕作労働者として定住したものが多く、彼らにとって自分の土地を持つことが成功への第一歩であった。ところがレイモンドでは、結婚していることが土地を手に入れるための条件にされていたという事情があった。マツヨさんはこれについて次のように語っている。

レイモンド・ナイトという人が「どこの人でも、どの国から来た人でも、土地は分けてやる。そのかわり、お酒と博打と、評判の悪い遊び場、女郎屋とか、そういうことは絶対しちゃいけない。もしも、そういうことに手をかけた人は、土地を取り返すという約束、この約束をするなら町を建ててあげる」と、こう言うたんです。……そして土地をね、百姓する土地を欲しい人には、是非ワイフがなくてははいけない。それは昔のことで、独身の人はとてもつとまらない、こう見たのです。けれども「ワイフがあれば、我慢ができるだろう」と言うてね、それでレイモンドにこられたミセスの人たちは皆、写真結婚です。ワイフがなくちゃいけないので、なければ土地を自分のものにできないので、それで写真結婚がレイモンドではね……。

写真結婚は白人の目には非人道的な結婚制度と映り、排日運動の口実として利用されたため、日本政府は1920年「写婚禁止」を在外公館に告示させた。だがカナダでは、写真結婚は1928年まで続いた。この間にカナダには多くの「写婚妻」が入国している。最盛期の1913年には、その数は300～400人にのぼると推定されている。したがって、1928年までのおよそ20年間に、数千人にのぼる「写婚妻」がカナダに渡ったと考えられる。こうして、1921年のセンサスで日系人はおよそ15,900人、1931年には23,300人余りを数えるようになったのである。かくしてルミュー協約という日系移民の実質的停止をねらいとしてとられた政策が、カナダ日系人の人口を逆に増加させるという皮肉な結果を招いたといえる。

それでは、写真結婚によって日本からまったく未知の世界を訪れた花嫁たちを待ち受けていた現実はどうなものであったのだろうか。まず母国日本とは大きく異なる気候風土を第一に挙げなければならない。アルバータの自然地形は果てしなく続く大草原（プレーリー）に要約される。プレーリーでは夏季は昼間の気温は高く、日差しが強く、空気は乾燥しているが、夜間になると急激に気温が下がる。つまり昼夜の温度差が極端に大きいという特徴がある。この気温の差がアルバータ産の小麦やジャガイモの質を良くしているのである。降雨量が極めて少なく何日も雨が降らないこともまれではない。植物の生育にはあまり適さないため自然状態では大きな樹木は育たないのである。したがって、樹木や芝生を育てるためにはスプリンクラーで絶えず給水することが必要である。冬季はプレーリーが内陸部に位置するため零下30度まで下がることもある。秋口から冬にかけて台風のように強い風（時速80－100km）が吹きつづける。地元の人々が「シュヌーク」と呼ぶこの強風はロッキー山脈から吹き降ろす暖かい乾燥した空気を平原部にもたらし、これによって前夜零下20度まで下がっていた気温が翌日にはばかばか陽気に変ずる。春先の気候も気まぐれで、ある日ブリザードが吹き荒れたかと思えば、次の日は真夏のような暑

さという次第である。要するに日本の温暖な気候や四季の微妙な変化に慣れたものには、あまりにも厳しい気候であり、あまりにも変化が激しく、これに適応するのは容易ではない。

次に日常生活の質を左右する最も重要なポイントとなる家屋の構造に目を転じると、当初南アルバータ日系人の大多数は、穀物倉庫を改造しただけの極めて粗末な家屋に住むことを余儀なくされた。それは家と呼べるような代物ではなく、小屋といった方がより適切な表現といえよう。大工仕事に不慣れな素人の仕事だから外観も不細工なことこの上ない。もちろん断熱材など使用しているわけもないから、薄っぺらな納屋のようなもので、壁は隙間だらけで、冬になると大きなツララが窓の内側にたれ、壁は一面霜が張りついて白くなる。トイレも多くが外便所であったから、冬に夜間トイレに行くのは気が重かったに違いない。気温は家の中でも外気と大きな違いがないから、汲み置きの飲料水を始めすべてのものが凍ってしまう。暖かい場所といえば、かうじてストーブの周りだけであった。夏は夏で日中は家の中は熱がこもり、まるでサウナのような暑さとなる。部屋の仕切りもなく、カーテン一枚で台所と寝室を分けているというのが大方であったから、プライバシーなど望むべくもない。日本の田舎でさえ電気が点いていたのにランプだけの薄暗い不自由な生活を我慢しなければならないのは仕方ないとしても、水道はおろか井戸もないためお風呂にも思うように入れないという状態であった。写婚妻のほとんどが農村出身者であったとはいえ、このような不自由な生活はつらいものがあつたに違いない。新天地での新婚生活の夢に胸を膨らませて太平洋を越えてきた末に、このような粗末な小屋にこれから住まなければならないと分かった時の彼女たちの気持ちを想像すると筆者ならずともやりきれない思いに駆られずにはおかない。

次に彼女たちを悩ませた問題は孤独である。言葉も通じない文化や生活習慣をまったく異にする土地に来て、彼女たちが頼りにする話し相手といえば近隣の同じ日系人の奥さんということになるが、当初はそもそも日系人の絶対数が少ない上に、妻帯者といえば極めて限られていた。岩浅伊都が1915年にレイモンドに来たとき、日系人の婦人はわずか5名であったという。しかも、都市と違ってレイモンドのような農村では一軒一軒が遠く離れているため、最も近い隣人を訪ねるのにさえ数マイルもの道のりを馬車や馬で行かなければならなかったことを考えると、彼女たちがいかに寂しい思いをしたかおおよそ想像できる。³⁰

南アルバータの日系人の間で歌われていた「アルバタの花嫁」は上に述べたような写婚妻たちの心情をよく表している。³¹

1. 妾が嫁いで来たところは

遠い遠い海越えて

着いた港が西の端

奥へ奥へと幾百里

よくも来たぞや平原州

2. 夫一人が頼りにて

朝夕眺める麦の波
地の果染める金色の
沈む太陽の西を見て
ああ父母と呼びし我

3. 去年の不作に今年又

ドライの風は吹き渡る
帰る路金のあらばこそ
まとう着物も色あせて
あわれ貧しき母となる

4. 冬は零下三十度

窓には湯気が凍りつき
今日も暮れ行く雪の中
夜のしじまに聞く音は
餌を求めて鳴くカヨテ

このほか医者が近くにいないため、あるいはかりに医者がいたとしても診察費が払えないために、病気や出産の際には適切な処置をとるのが遅れて手後れになることも少なくなかったと思われる。このように、数え上げればきりがなほどの苦難が彼女たちを待ち受けていたわけだが、それらを一つ一つ乗り越えることで彼女たちは新しい世界に適応したくましく生き抜いて子どもたちを育て上げていったのである。

4. 鉄道建設労働者と炭鉱労働者の到来

19世紀末から20世紀初頭にかけて、カナダ西部では盛んに鉄道の建設が進められた。この鉄道建設労働には苦力（coolie）と呼ばれていた中国系移民が主として従事したことはよく知られている。だが南アルバータの鉄道建設の場合には、日系人が大きな役割を果たしたという事実を強調したい。

1906年以降、CPR（カナダ太平洋鉄道）と独占的契約を結ぶ「日加用達会社」が日系人労働者を供給し始めたことにより、労働力の安定的供給が可能になった。「日加用達会社」は、ただたんに労働者を供給するだけに止まらず、現場監督者や主任をも供給したのである。この斡旋業者（俗に言う「口入れ屋」）のおかげで、契約会社は従来のように個々の労働者に賃金を支払うという面倒な業務が必要なくなって、「日加用達会社」に労賃を一括して支払えばよいことになった。個々の労働者は「日加用達会社」との間で合意に達した基準にしたがって賃金を支払われる。斡

旋業者は幹旋手数料として月に1ドルを個々の労働者から徴収し、その他労働者の必要に応じて食糧、衣類、日常生活用品などを有料で提供した。この他に、医療費として月50セント、郵便物手数料として、同じく月50セントが労働者から徴収された。³²

1908年、およそ600名の日系労働者が南アルバータ地域に鉄道建設労働者として集団で就労している。この大量の日系労働者の労働市場への参入に対して、地元の組織労働者たちはどのような反応を示したであろうか。当初、南アルバータの労働組合は、日系人の労働市場への参入に対し、強い拒否感を表明し、自分たち白人の職場が東洋人によって荒されることへの警戒心をあらわにした。事実この年、CPRの機械工たちは抗議のストを打っている。³³

「レスブリッジ・デイリー・ヘラルド」によれば、地元の組織労働者は日系人労働者の労働市場参入をめぐる対立する二つのグループに分裂していた。第1のグループは、全てのアジア人をカナダから放逐すべきであると主張し、日系労働者の職場からの排除を求めた。これに対して第2のグループは、日系労働者を組合に加入させることによって、資本家に対抗しようとする戦術をとったのである。³⁴

次に炭鉱労働者について述べると、BC州の日系人は早くから炭鉱で働いていたが、最初の日系炭鉱労働者が南アルバータのガルト炭鉱（Galt Coal Mines）に来たのは1909年であった。³⁵ 最初はやはり日系人に対する排斥や差別が見られたが、次第に受け入れられるようになる。日系の炭鉱労働者には沖縄出身者が多く、彼らの勤勉さと空手の知識が白人たちの信頼を得るのに役立ったという。これらの日系人はもと鉄道建設労働者（線路工夫）として働いていたが、より賃金の高い炭鉱へ転職したものが多数見られた。炭鉱での労働はきつく、危険も伴ったが、賃金は日給で2ドル40セントから2ドル85セントという当時としては高給であった。先発の炭鉱労働者たちはそのほとんどが単身者で占められていたが、徐々に世帯持ちが増えてゆき、1920年代には多くの日系人家族が炭鉱町に定住するようになる。³⁶

5. 甜菜栽培農場労働者から自作農へ

南アルバータにおける日系人移住の歴史において、最初に本格的かつ恒常的な日系人の入植がなされたのは、レイモンドの甜菜栽培農場であったことはすでに述べたところである。レイモンド・ナイトの経営するナイト製糖会社がレイモンドに設立され操業を開始したのが1904年であったが、そこでの最大の問題はいかにして甜菜栽培農場で間引きや収穫の作業に従事する農業労働者を調達するかにあった。この会社はその後も慢性的な労働力不足に悩まされ続けることになる。東洋系労働者は賃金も安く勤勉ではあるが、白人社会には東洋系にたいする強いアレルギーがあって、会社としてもその採用には二の足を踏むことになる。しかしながら絶対的な労働力不足という現実の前では選択の余地は無く、人種的偏見は一時後退せざるをえなかった。当初ナイト製糖会社はBC州から50名の中国系移民を連れて来たが結果は思わしくなかった。彼らはこの種の労働には適性がなかったために、多くの者が他の仕事を求めて去ってしまったのである。³⁷

そこで、中国系にかわるものとして、1909年の春、日系人百数名がBC州の海岸部からレイモン

ドに連れてこられた。これは日系一世の早川一朗（アメリカ合衆国上院議員S・Y・ハヤカワの父親）が「日加用達会社」を通じて行った事業で、この日系人のなかには、後に「レイモンド日本人協会」の初代会長を務めた岩浅享淳がいた。この頃、ベルギー人労働者も大量にレイモンドに集団入植している。³⁸

レイモンドに定住した日系人たちは、農業労働者としての地位に甘んずることなく自作農をめざし、やがて自分たちの農耕地を購入し始める。彼らの多くはナイト製糖会社の農場で働いた経験があり、独立して農業を営むための知識や経験をすでに身に付けていたのである。プレーリー（大草原）に位置する南アルバータの夏の気候は、高温で乾燥しており、昼夜の温度差が極端に大きいという特徴を持つ。現在でも同地域の農業は周期的に干魃に襲われ続けている。したがって、そこでの農業経営にとって最大の難問は、いかにして農業用の水を確保するかにあった。このため南アルバータには「イリゲーション・カントリー」の別称があるくらい早くから灌漑が発達しているが、レイモンドの日系人たちはモルモン教徒たちからこの灌漑農業の知識や技術を学んだのである。

こうしてレイモンドに定住した日系人のうち、干魃や凶作のためにBC州や日本に戻ることを余儀なくされた者たちの数は決して少なくなかった。1910年の時点で、レイモンドに止まっていた日系人の数は当初の百数名からおよそ60名までに減っていた。この間に早川一朗もカルガリーに去っている。だが1911年、ついに豊作が来てレイモンドの農業はやや明るさを取り戻す。1913年に日系農民たちは、ささやかなものではあったが野菜の協同組合を結成して、ジャガイモを中心とする野菜類をカルガリーに出荷している。³⁹

かくして、1914年の第一次世界大戦勃発の年までには、レイモンドの日系人はようやく同地域のコミュニティに根を下ろし始めたのである。

Ⅱ 発 展 期

1. 第一次大戦と日系カナダ義勇兵

1914年6月28日、ボスニアの首都サラエボでオーストリアの皇太子が射殺されるという事件をきっかけに、瞬く間に戦火がヨーロッパに広がった。第一次世界大戦の勃発である。当時の日本は日英同盟により、英国、カナダとは同盟関係にあった。8月23日、日本はドイツに対し宣戦布告をし、ドイツのアジアにおける根拠地青島を攻撃し、たちまちこれを陥落している。10月3日、カナダもまた3万余の兵を英国に送り出した。

ところで、当時の日系カナダ人の置かれていた状況はいかなるものであったかという点、カナダに帰化しても依然として選挙権は認められないままであった。選挙権がないということはなにを意味したか。どんなに人種差別的な立法がなされても、選挙権がなければそれに対抗する有効な手段がない。日系人を鉱山、山林、漁場などから締め出そうとする法律が、次々と議会にかけられても、票に結びつかない日系人のためにそれに反対しようとする政治家はほとんどいなかった。

た。選挙権さえあれば、日系人の声も政治の場面に反映させることができる。このような日系人の悲痛なまでの願いを現実にするための千載一遇の好機がついに到来したのだ。つまり、カナダ在留の日系人が義勇兵として欧州戦線へ出征することによって、カナダに対する忠誠心の証を立て、そうすることで最終的には選挙権を獲得できるのではないかと、との夢である。

かくして、カナダ日本人会は1915年12月から日系人義勇兵を募り、これに応じて200名を超える応募者があった。1916年1月からヴァンクーヴァーのカドバ・ホール（Cordova Hall）とパウエル・グラウンド（Powell Ground）を使用して、義勇兵の教練が始められた。ところが、カナダ政府側は日系人義勇兵の取り扱いについて明確な態度を示さないまま回答を引き伸ばしていた。そこで、カナダ日本人会はオタワに代表を派遣し、明確な政府の返事を迫ったが、その回答の趣旨は「もし日系人義勇兵を一個大隊（1,100名）編成できるだけの人数を集められるのなら、許可を出しても良い」というものであった。これは明らかにカナダ政府が意図的に日系人義勇兵の採用を拒否したということを意味していた。この背景には、一部の排日的な政治家による猛烈な反対運動があったことは間違いない。⁴⁰

色々紆余曲折はあったが、1917年5月に入って、アルバータ州軍管部から「日本人志願兵を採用したい」旨の申入れがあった。かくして最終的に日系義勇兵たちは、アルバータ州第13騎歩兵隊（the 13th Cavalry Battalion）への入隊を許され、42名の日系義勇兵が第一陣としてヨーロッパ戦線へと向かった。このようにカルガリーにあった第13騎歩兵隊が日系人義勇兵を受け入れたという事実は、なによりもアルバータ州ではBC州に比べて日系人への排斥運動が弱かったことを反映している。

日系人の戦死者数の割合がかなり高かったことは数字に明確に現れている。196人の日系兵士のうち、戦死者は実に54人、負傷者も93人を数えた。ヴァンクーヴァーのスタンレー公園の一角にこれらの勇士をたたえた「義勇兵記念碑」が建っている。⁴¹ このように彼ら日系兵士たちは自らの忠誠心を身をもって示すために激戦地での戦闘に率先して参加し、勇敢に戦ったのである。レイモンドの日系人のなかからも数名の義勇兵が参戦しており、10名近い戦死者が出ている。特筆すべきはフランス戦線で戦死を遂げた杉本吉松のために、レイモンドの町を挙げて追弔の式典が催されたという事実である。⁴²

2. 「レイモンド日本人協会」の結成

1914年は、欧州で第一次世界大戦が勃発した年であるが、同時に「レイモンド日本人協会」が結成された年にあたる。「レイモンド日本人協会」は、次の5つの目標を掲げて発足している。⁴³

1. レイモンド在留日本人の社会的福利の向上をはかる。
2. レイモンド在住の白人との関係を改善し、彼ら白人とより良い協力関係を保つべく努める。
3. レイモンド在留日本人の進歩発展を促進する。
4. 窮状にある日本人を金銭的に援助する。

5. 南アルバータにより多くの日系農場労働者を供給する努力をする。

初代会長には岩浅享淳が選ばれ、第2代会長には武田太三郎が、第3代会長には畑中義雄がそれぞれ就任している。ここで特記すべきは、日本人協会の組織化において岩浅享淳が大きな役割を果たしたという事実である。岩浅はその人柄とリーダーシップによって日系人同胞の信頼が厚く、語学力も優れていたため日系人を代表して白人とのありとあらゆる交渉（土地の買収や借地契約、白人と日系人のあいだのトラブルの解決など）にあたったり、時には英語を話せない日系人に代わって法廷に立って証言するなど、彼の存在を抜きにしてレイモンド日系人社会は語ることができないといっても過言ではない。⁴⁴

レイモンド日本人協会の結成は、南アルバータの日系人の歴史において、一つの里程碑ともいえるべき重要な出来事であったといえる。それはまず第一に、南アルバータ、とりわけレイモンドの日系人たちが、自分たちの長期的問題を自らの努力で解決しようとし始めたということの意味していた。第二に、同協会の目標の2番目に掲げられているように、彼ら日系人は、地域社会を構成する他のメンバーたちに同化し、より強い協力関係を打ち立てようとしているということの意味した。つまり、彼ら日系人が日本人協会を結成したということは、彼らが「出稼ぎ者意識」から脱却し、自らの意思で選びとった土地である南アルバータに自分たちの未来をかける決意を固めたということを示しているのだ。

在加日系人の互助組織としての日本人会は、すでにヴァンクーヴァーを中心として、BC州各地において組織化が進んでおり、レイモンドはこの点では後進地域であったといえることができる。しかし、こと日本人会（以下日会と略記）のあり方ということになると、レイモンドのそれにはむしろ先進的な面が見られたのではなかろうか。というのも、BC州の日会にはいろいろと問題点が多く、日会無用論や日会改造論さえ出ていたのである。⁴⁵

1914年には、上述の日本人協会の結成と時を同じくして「盟同青年会」が発足している。南アルバータには多くの独身日本人青年男子（その大多数が20代であった）が在留しており、彼らの多くは鉄道建設や炭鉱などの肉体労働に従事していた。言葉もままならず、異性との交際の機会もなく、ひたすら厳しい肉体労働に明け暮れる彼らを慰めるものは何だったのかと考えると、これといって思い浮かぶものもない。異国の地での単身者の侘しさをまぎらわせるために、ともすれば彼らの多くはギャンブルや酒色に走りがちであった。また南アルバータには、早くから各地にその種の遊興施設（娼館や賭博場）があり、彼らの欲望をそそり立てていた。⁴⁶ 彼らがそれら遊興の場で金を使い果たしたとしてもあながち責めることはできない。このような事情のなかから「盟同青年会」のような組織の必要性が生まれたのは理解できる。すなわちこの組織は、独身青年の持て余すエネルギーをスポーツやレクレーションを通じて健全な方向に嚮導し、良き市民として白人社会の信頼を勝ちとるべく道徳的指導教化の場となることが期待されていたのである。

最後に、レイモンド日本人協会の第5番目の目標として掲げられている「農場労働者の供給」について述べることにしよう。1907年にルミュー協約がカナダ政府と日本政府の間で締結されたために、日本からカナダへの農業労働者の移民は著しく制限されることになった。具体的にいう

と、カナダ在住の日本人農業経営者が所有する農地100エーカーについて日系移民（契約移民）の入国は10人までしか認めないということになった。しかも、農業労働者としての契約移民の入国者数は、家内使用人と合わせて年間400名以内に制限されることになった。1928年にはルミュー協約の改訂がなされ、制限はより厳しいものとなった。具体的には、カナダへの日本人移民は、農業労働者、家内使用人、カナダ在住日本人の妻子を含めその総数を年間150名以内とすること、さらに写真結婚による日本婦人の呼び寄せを止めるというものであった。

このような制約の下で、南アルバータの日系農業経営者たちは可能な限り多くの農業労働者を日本から呼び寄せようと努めたのであるが、その際レイモンド日本人協会が大きな役割を果たしたことは言うまでもない。すなわち、同協会が南アルバータ在住日系人の人的ネットワークを通じてその親戚・知人に働きかけることで数百名もの農業労働者を呼び寄せるという実績を上げているのである。⁴⁷

3. 炭鉱労働者の定着と「ハーデヴィル同志会」の結成

日系カナダ人のうちにカナダ生れの二世が占める割合が半数近くになるのは、1930年頃である。つまり、1920年代に二世が誕生し家族形成がきわめて急速に進行したことによって、安定した日系コミュニティが出現したのである。当時日系人が住み着いた南アルバータの炭鉱町としては、ハーデヴィル（Hardieville）、コールハースト（Coalhurst）、ダイヤモンド・シティ（Diamond City）、スタッフォードヴィル（Staffordville）、レスブリッジ（Lethbridge）などがあげられる。⁴⁸

このようにして、徐々にではあるが、日系人たちは炭鉱労働者のコミュニティに受け入れられていったのである。日系人炭鉱労働者が南アルバータのコミュニティに比較的スムーズに受け入れられるようになったのには、次のような要因が作用したものと考えられる。

第一に、南アルバータにはドイツ、イタリア、さらにハンガリー、ウクライナなど東ヨーロッパ系の移民が早くからエスニック・グループを形成していたために、そこにはBC州とは異なる、ある意味できわめてコスモポリタンな雰囲気が醸成されていた。第二に、日系人鉱夫は地下の切羽（石炭採掘現場）での作業を認められていなかったし、その数も比較的少なかったので、その存在が他のグループの仕事を脅かすまでに至っていなかった。第三に、日系人はその生活のすべてを炭鉱に依存していたわけではなく、夏季には農業にも従事していたという事実をあげなければならない。第四に、1909年以降、日系人は炭鉱労働者組合の地方支部に加盟することを認められ、組合活動において積極的な役割を果たすようになっていたのである。⁴⁹

1914年にレイモンドに日本人協会が結成されたのに引き続き、1921年にハーデヴィルに「ハーデヴィル同志会」（Hardieville Friendship Society）が結成され、初代議長に比嘉親利が就任している。会員数は50名で組織の目的として次の3つを挙げている。

1. 会員相互の親睦を図り、会員すべての幸福の増進を目指す。
2. 文化的にも財政的にも成長すべく相互に助けあう。

3. 炭鉱で働く者が事故その他の問題に遭った時には援助する。

会員の多くは「ガルト炭鉱」の6番鉱で働く沖縄出身者の鉱夫たちで占められていた。とはいえ、沖縄以外の府県の出身者も会員になることは認められていたために、「同志会」はハーデヴィルやコールデールなどの炭鉱街において重要な社交の場を提供した。

1924年にはハーデヴィルの日系人とレイモンドの日系人が集まりピクニックを開催したが、以後これが毎年恒例の行事となった。このピクニックでは日ごろ交流の乏しい沖縄出身者と本土の府県出身者とが集い、ソフトボールや野球の試合を通じて互いに競い合うという形で親睦を深めたのである。ハーデヴィルでこのピクニックが開催されるときには、メドルマ農場か比嘉親米農場が、レイモンドで開催される場合は西村武八農場がそれぞれ会場となった。時として白人のソフトボール・チームとの対抗試合が催されることもあり、この時は大変な盛り上がりを見せることになった。⁵⁰

4. 日系人農業の発展

生成期を通じて日系農業労働者のなかから自作農へ転換をとげることに成功した者たちが出たことはすでに述べたが、1914年から始まる発展期の間に、日系人の農業経営はほぼ順調に発展を遂げ、数次に及ぶ土地の買収を繰り返すことによって、ついに日系人のなかから大農場経営者が出現するに至る。次に、第一次世界大戦が勃発した1914年から同大戦終結の年1918年までのレイモンドに留日系人による農業経営の実態がいかなるものであったかを年次別に見てみよう。⁵¹

1914年は早魃がアルバータを襲い、麦作は夏耕地だけが若干の収穫を見たが、野菜は比較的灌漑の便の良いところでも平年の2分の1の収穫に終わった。最も被害が大きかったのは甜菜であるが、幸い甜菜の市場価格が高騰したために、収入はかえって予想外に多かった。この年、畑中義雄は従来の協同組合が解散されたために売りに出された土地80エーカーを譲り受け、その他に80エーカーを購入し、さらに80エーカーの借地をも手にいれ、160エーカーの植付けを試みるという積極的な単独事業経営に乗り出している。

欧州で第一次世界大戦が勃発したことにより1915年に麦の価格が高騰した。この煽りで次第に甜菜栽培は麦作に圧倒されるようになっていたが、この結果、ついにレイモンドのナイト製糖会社は解散に追い込まれるに至る。このため、同社に雇用されていた大量の日本人労働者が失業することになったのである。甜菜栽培のかたわら麦や野菜などの耕作に従事してきた日系農民たちは同胞の窮状を見てその救済のために奔走した。その努力のかいあって、レイモンドの日系人たちは四散することなく同地に定住することになったのである。

この年の活動で特に注目に値すると思われるのは岩浅享淳、武田太三郎を始めとする12名の日系人が「共同借地耕作」に踏切り、2,730エーカーの土地とそれに付属する建物、機械類、農耕馬を借り入れ、800エーカーの土地に麦を播いて、大農経営に乗り出したことである。このことから、当時すでに日系人にたいする白人の信頼がかなり高いものであったと推測できる。

ここで特筆すべきは畑中義雄である。彼は上述のように、早くから農業経営に積極策を採って

きたが、蒸気機関を動力とするコンバインや脱穀機などの農業機械を他に先駆けて購入して合理化を進め、大農的経営を展開した。蒸気機関を動力とした農業機械の使用は、当時白人農業者の間でも数少なく、快挙というべきであった。1916年にはまた、浅海高之助と田中軍二他数名が発起人となり、農業者の相互救済を目的とする公共金融機関「レイモンド信用金融社」が設立されている。

1915年から1917年の3年間にわたり好況が続いたため、日系農民のなかから新しく企業経営に乗り出したり、従来の経営規模をさらに拡大する者が出現した。上述の畑中義雄に至っては、遂に白人十数名を雇用するまでになったのである。かくしてレイモンドの日系農業は「第2期全盛期」に突入した。この結果、一時的な収穫の不良に見舞われることがあっても、もはや以前のよう大きな打撃を受けないですむまでに、その経営基盤は着実に安定に向かいつつあった。この時点におけるレイモンド在留日系人の数は、男女子ども合わせて153名であり、そのうち事業経営者は49名であった。その耕地面積は所有地、借地を合わせると12,000エーカーにおよび、きわめて短期間に長足の発展を遂げたといえる。

5. 「レイモンド仏教会」の設立

上述のように、第一次大戦の軍需景気の影響もあって、1910年代から1920年にかけて、南アルバータの日系人人口は増加傾向を示す。国勢調査の統計で見ても、1901年にわずか13名に過ぎなかった日系人が、1911年には247名、1921年には473名と着実に増加に向かっていることがわかる。この傾向は1920年代も続くが、この人口変動の内訳を見ると、他地域からの人口流入による「社会増」よりは二世誕生による「自然増」が日系人人口増加の主たる原因であったことが明らかである。カナダ生まれの日系人、すなわち二世の数が増えるに連れて必然的にその教育をどうするかという問題が発生してきた。

このような一世たちの悩みを解決するためには、日本人協会を組織面でも資金面でもさらに拡充させることが先決問題であった。かくして誕生したのが「レイモンド仏教会」であるが、その契機となったのが日本人協会の初代会長を務めた岩浅享淳宅での法要であった。⁵²

「レイモンド仏教会」は当初日本人協会内に宗教部門として置かれ、初代仏教会会長には当時日本人協会の会長の職にあった弘中與一がそのまま就いている。また仏教会の建物は、当時たまたまモルモン教会が新築され旧会堂が不用となったので、折衝の結果、敷地建物を5,000ドルで譲渡してもらい、階上を聖堂とし、収容人員は約300名とし、旧ロイストン仏教会から寄付された内陣を安置した。また階下を開教使室と教室、道場などに改造し、初代開教使の着任に備えた。モルモン教会側が旧会堂とその敷地を仏教会に譲渡した上のエピソードは、まさにレイモンドの白人社会と日系人社会の関係がいかなるものであったかを端的に物語っている。すなわち、当時の白人社会の日系人社会に対する信用度はかなりのものであったと推測される。⁵³

仏教会の組織形態について簡潔に述べると、中央機関としての総合仏教会のもとに、一世男子からなる「報恩会」、一世、二世の年長の女子からなる「婦人会」、二世の壮年男子からなる「壮

年会」、青年男女からなる「青年会」、さらに「少年会」「少女会」などの付属団体が置かれている。仏教会の会員はこれらの団体の何れかに所属する。

仏教会の事業としては、日曜学校（幼稚園児を含む）、日本語学校、武道後援会、映画部、購買組合があげられる。仏教会の維持運営はその財源を会費、寄付、基金利子、購買組合からの補助等に求めている。財政的にはかなり苦しい状態が続き、開教使の手当も十分なものではなかった。

仏教会発足当初は駐在開教使がいなかったため、教区開教使河村勇哲師に毎日定期的に巡回してもらおうという形態をとらざるをえなかったが、1930年6月4日、いよいよ初代駐在開教使として永富信常師が本願寺下付の方便仏を奉載して日本からカナダまで単独渡航の末レイモンドに到着した。『レイモンド仏教会史』によれば「師は三十歳、竜大卒の山口県人、温厚風雅にして如才なき社交家で書を能くし、口演は師の得意とする所であった」とある。⁵⁴

1931年2月25日、日本人協会は合議の結果、従来は日本人会の一部門として取り扱っていた宗教部を表に出し、正式に「レイモンド仏教会」と改称し、日会の事務一切は無条件で仏教会が引き受けることにし、仏教会を日系人社会唯一の統制機関とすることを承認した。同時に全協会員はそのまま据置きで仏教会員名簿に転籍登録し、これによって15年におよんだ「レイモンド日本人協会」の歴史は幕を閉じることになった。

1934年7月5日、永富開教使の辞任のあとを受けて、2代目河村勇哲師（26歳）が妻子同伴で着任している。この河村師は歴代の開教使のなかでは最も長くその職にあったのみならず、日系人社会への貢献度においても極めて大きなものがあった。現在でも南アルバータ在住の日系人の口から同師に対する敬愛のこもった賛辞を耳にすることが少なくない。⁵⁵ しかしながら1936年頃から、仏教会の信徒のあいだに2つの派閥が形成され、両者の対立関係は仏教会を舞台に次第に険悪なものになっていったようである。その派閥抗争の煽りを受けて、河村師は開教使辞任に追い込まれ1940年1月13日、レイモンドを去るという予想外の方に事態は発展していった。しかしながら、開教使を失った仏教会は火の消えたようになり、やがて信徒の間から開教使要望の声が上ってきたため、仏教会は臨時総会を開催、会長以下役員は全員責任をとって辞任し、信徒総員は仏前に謝罪するというこでこの件は一段落した。

レイモンドに仏教会ができたことで、南アルバータの日系人たちはますますレイモンドを日本文化のセンターとみなすようになる。事実、毎年4月の花祭りや7月のお盆会のような仏教行事には、南アルバータのいたるところから日系人が集まってきて旧交を温め、また新たな知己を得たのである。いうまでもなく、これらの行事が日系人相互の連帯意識を強化するという潜在的機能を果たしたことは忘れてはならない。

6. 日系人子弟の教育

1920年代に入り二世人口の増加にともなって必然的に発生したのが、日系人子弟の教育問題である。南アルバータ生まれの二世たちは、ごく少数の例外を除いてその大多数が地元の学校に通っており、英語による授業を受けていた。1934年に「レイモンド仏教会」の開教使として赴任

した河村勇哲師は当時レイモンド日系人子弟の通っていた地元の学校（マンモス区の小学校）の様子について次のように記述している。

勉強に来る子供達は、それぞれ二哩、三哩と離れた所から、兄弟或いは姉妹が乗り馬で駆け付けて来る。皆はだか馬であった。一頭の馬に二人、三人と乗ってくる。前の子供は手綱を取り、あとにくっついて乗っている子は、ラーダの空缶に入れた弁当と、本を両手にさげてくるのであった。……午後の授業が終わると、子供達は暑い日の放課後、ハダカ馬に乗って家へ帰る。もう疲れているので、家に近くなった頃には馬の上でうとうとと眠っている子供もあった。馬は、自分の家のゲートに着くと止まる。そうすると、子供達は目を覚まして馬から降り、ゲートを開けて自分の農家の屋敷に入っていくと言うような事であった。マンモス区の学校には、馬を入れる馬小屋が建てられてあり、馬草も貯えられていた。学校が一軒あるだけではたには何の建物も見えないプレリーの一軒家であった。ここで、白人未婚の若い女性の先生、ミス・アンダソンが六年生までを一人で教へて居られた。⁵⁶

このように日系人の子弟が地元の白人子弟と同じ学校に通学していたことは、彼らの白人社会への適応・同化を促進したが、半面彼ら二世たちは日本語による自己表現に不自由をきたし、一世と二世の間のコミュニケーションもスムーズにできないような事態が生じ、また意識においても西洋化が著しく、これがひいては彼ら二世たちの日本人としてのアイデンティティを次第に希薄にしていくことにつながるのではないかと懸念された。

BC州の日系人たちの場合、子どもがある程度の年齢に達すると日本へ送って日本人としての教育を受けさせたり、リトル・トウキョウにあった日本語学校に入れることができたが、南アルバータの日系社会のように、小規模の日系コミュニティがいくつかの町に散在している状況では、日本語学校を設立・運営するといっても、資金面でも人材の点でもただちに大きな困難に直面してしまうであろうことは容易に予想されたところである。⁵⁷

1928年、レイモンド在住の日系人家族のなかから、彼らの子弟の教育に当たる日本人教師を招こうという動きが始まった。こうしてBC州のカンバーランドから大山牧師が招かれ、岩浅宅に滞在、数人の子どもたちに勉強を教えた。当初は岩浅宅を教室として使用していたが、後に使われていない穀物倉庫を引っ張ってきて校舎の代用とした。しかし、1929年に「レイモンド仏教会」が設立されることによって、この小さな学校は幕を閉じることになった。

（以下次号）

注

- 1 筆者とアルバータの日系人との最初の出会いは1984年秋に筆者がレスブリッジ大学客員教授として南アルバータを訪れた際に、数人の日系人の方々と個人的に知り合いになり親しく交際させていただいたことに端を発する。なかでもレイモンド生まれの日系2世のマツヨ・モリヤマさんとは家族ぐるみの交際となった。モリヤマさんは当時70歳の高齢であったが、その抜群の記憶力と旺盛な向学心・知的好奇心には強い感銘をうけたものであった。モリヤマさんは高橋松三郎・マン夫妻の間に長女として1914年にレイモンドで生まれている。筆者はモリヤマさんから数回にわたり生活史の聞き取りを行なっている。村井忠政著「ある日系カナダ人女性の生活史—口述の記録と解説—（Ⅰ）～（Ⅲ）」『学園論集』第72号（1992年9月）、第74号（1992年12月）、第77号（1993年9月）、北海学園大学教養部。村井忠政著「ある日系カナダ人女性の生活史—口述の記録と解説—（Ⅳ）～（Ⅵ）」『研究紀要』第53集（1994年11月）、第54集（1995年3月）第56集（1996年3月）、名古屋市立女子短期大学。
- 2 日本軍による真珠湾攻撃に端を発した太平洋戦争の勃発に伴い、カナダ連邦政府はすべての日系カナダ人を国籍の如何に関わらず「敵性外国人」（the enemy alien）と規定し、彼らの市民権を大幅に制限する措置に出た。当時の首相マッケンジー・キングは1942年2月の通告ですべての日系人に対して「防衛地域」からの立ち退きを命じた。これにより、BC州内の日系人たちは財産を没収され、わずかな手荷物だけで我が家を後にしたのである。その多くはロッキー山脈内の収容所に向かったが、道路建設の現場（ロード・キャンプ）やアルバータの甜菜栽培農場へ向かった者もいた。詳しくは次の文献を参照。Ken Adachi, *The Enemy That Never Was*, Toronto: McClelland and Stewart, 1976. W. Peter Ward, *White Canada Forever: Popular Attitudes and Public Policy Toward Orientals in British Columbia*, Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press, 1978. Ann G. Sunahara, *The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During The Second World War*, Toronto: James Lorimer & Company Publishers, 1981. Toyo Tanaka, *Nikkei Legacy: The Story of Japanese Canadians from Settlement to Today*, Toronto: NC Press Limited, 1983. Roy Miki and Cassandra Kobayashi, *Justice in Our Time: Japanese Canadian Redress Settlement*, Vancouver: Talonbooks, 1991.（ロイ・ミキ、カサンドラ・コバヤシ著、佐々木敏二監修・解説、下村雄紀・和泉真澄訳『正された歴史—日系カナダ人への謝罪と補償—』つむぎ出版、1995年）
- 3 日系人に対する偏見、差別、法的規制などについては次の文献を参照されたい。新保満著『人種的偏見と差別—理論的考察とカナダの事例—』岩波書店、1972年。新保満著『石をもて追われるごとく—日系カナダ人社会史—』大陸時報社、1975年。新保満著『日本の移民—日系カナダ人に見られた排斥と適応—』評論社、1977年。新保満著『カナダ移民排斥史—日本の漁業移民—』、未来社、1985年。吉田忠雄著『カナダ日系移民の軌跡』人間の科学社、1993年。マリカ・オマツ著、田中祐介・田中デアドリ訳『ほろ苦い勝利—戦後日系カナダ人リドレス運動史—』現代書館、1994年。ロイ・ミキ、カサンドラ・コバヤシ著、佐々木敏二監修・解説、下村雄紀・和泉真澄訳『正された歴史—日系カナダ人への謝罪と補償—』つむぎ出版、1995年。飯野正子著『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年。
- 4 ヴァンクーヴァーを中心とした太平洋岸の日系人社会の生成・発展の歴史を分析した新保満はその生成期（形成期）を1877年—1907年としている。1877年は日本からの移民が初めてカナダの土を踏んだ年であり、1907年は自由渡航ができた最後の年である。新保満著『日本の移民—日系カナダ人に見られた排斥と適応—』前掲書、30頁。
- 5 カナダの日系人たちが自ら進んで義勇兵として参戦しようと熱心な運動を繰り広げた背景には、カナダ国家に忠誠を示すことで市民権と選挙権を獲得しようとの狙いがあった。詳細については工藤美代子著『黄色い兵士達—第一次大戦日系カナダ義勇兵の記録—』恒文社、1983年、を参照。
- 6 ロイ・ミキ、カサンドラ・コバヤシ著、前掲訳書、参照。
- 7 Barry Broadfoot, *Years of Sorrow, Years of Shame*, Toronto, Doubleday Canada, 1977.
- 8 Muriel Kitagawa, *This is My Own: Letters to Wes & Other Writings on Japanese Canadians*,

1941-1948, Vancouver: Talonbooks, 1985. Keibo Oiwa, *Stone Voices: Wartime Writings of Japanese Canadian Issei*, Montreal: Vehicle Press, 1991.

⁹ 1901年に実施された第4回カナダ国勢調査（センサス）によれば14人の日系人が北西準州（当時アルバータはこの中に含まれていた）に居住している。したがって1901年以前にすでにアルバータに日系人がいたことはまちがいない。しかしながら、記録に残っており、しかも名前を特定することができる最も早く南アルバータに滞在（一時的なものでなく）した日本人ということになると1906年の正月にカルガリーに到着した稲増熊太郎があげられる。彼は1900年にカナダに渡りヴァンクーヴァーのCPRホテルでC・D・タプレルのもとで働いていたが、1905年にカルガリーのアルバータ・ホテルを同氏が買収したのに伴い、稲増は同地にコックとして送り込まれたのである。David Iwaasa, "Canadian Japanese in Southern Alberta: 1905-1945," in Roger Daniels(ed.), *Two Monographs on Japanese Canadians*, Arno Press, New York, 1978, pp. 1-2.

¹⁰ 中山訊四郎編『加奈陀之寶庫』（自費出版）東京、1921年、503頁。

¹¹ 工藤美代子著『写婚妻』ドメス出版、1983年、134-136頁。

¹² Yasaburo Yoshida, "Sources and Causes of Japanese Emigration," *Annals of American Academy of Political and Social Science*, Vol. 34, No. 2, Sep. 1909, p. 160.

（府県名）（パスポート発行件数）

1. 広 島……………21, 871
2. 熊 本……………12, 149
3. 山 口……………11, 219
4. 福 岡……………7, 698
5. 新 潟……………6, 698
6. 和歌山……………3, 750
7. 長 崎……………3, 548
8. 兵 庫……………3, 532
9. 岡 山……………2, 176
10. 宮 城……………1, 613
11. 福 島……………1, 613
12. 愛 媛……………948
13. 愛 知……………767
14. 福 井……………683
15. 滋 賀……………646
16. 佐 賀……………624

その他の府県 (27)

の合計……………5, 041

合計……………84, 576

¹³ 大陸日報社編『加奈陀同胞発展史 第三』晚香坡大陸日報社、1924年、57-58頁。

¹⁴ 「レーモンド地方在留日本人」として中山があげている日系人すべての姓名と出身府県名を次にあげる。

（中山訊四郎編『加奈陀之寶庫』前掲書、510-511頁の表より作成）

（府県別） （人数） （姓 名）

秋田県 （1） 石川 龍三

宮城県 （1） 大友 友作

福島県 （3） 高橋松三郎

東京都 （3） 伊木 久雄

玉根清四郎

飯山 信夫

須貝 鶴三

小谷田竹次郎

静岡県	(2)	山内 三平	宮内 熊蔵		
長野県	(1)	唐木 喬			
滋賀県	(1)	小坂胤三郎			
三重県	(3)	西村 武八	坂 作太郎	杉本木三郎	
和歌山県	(1)	竹中 政平			
広島県	(4)	岩浅 享淳	岩浅 唯雄	岩浅 謹一	秋山 襄六
岡山県	(1)	立川 圓蔵			
山口県	(1)	弘中 與一			
愛媛県	(2)	玉置 栄治	武田太三郎		
熊本県	(2)	園村 永太	田中 軍次		
鹿児島県	(9)	畑中 義雄	當房 庄市	大濱 金次	鮫島 田原
		中村 彦熊	井口 弥一	隈元清次郎	松山吉之助
沖縄県	(10)	大城 保和	玉城 宮二	後新門仁平	安里 松貞
		饒邊 武太	安谷屋太郎	宮城 増郎	仲村 樽留
		高屋 武夫	大城 加那	上間	
朝鮮	(1)	松野 豊一			

¹⁵David Iwaasa, *op. cit.*, p. 7.

¹⁶移住を促す一般的な要因としては、政治的要因、経済的要因、社会的・宗教的要因、自然的要因などがあげられる。とはいえ、これらの要因は単一に作用するのではなく複合的に働くのである。また時代と共に移住の動機も変化して行くものであることは言うまでもない。わが国の戦後（昭和30年代－40年代）の海外移住の個人的動機の変化を探究した論文としては、鈴木俊著「海外移住者の動機の変化に関する研究」『移住研究』No. 11（1975年2月）がある。

¹⁷当時の日本では1892年から1903年のおよそ10年間に、一里四方あたりの人口密度が1,657人から1,885人に増加している。David Iwaasa, *op. cit.*, p. 4.

¹⁸北村崇郎著『一世としてアメリカに生きて』草思社、1992年、282頁。

¹⁹マツヨ・モリヤマに対する筆者によるインタビューより。

²⁰David Iwaasa, *op. cit.*, p. 4.

²¹*Ibid.* p. 5.

²²移住の意思決定に用いられる「プッシュ要因」－「プル要因」の理論モデルはある程度の有効性を持つことは否定できないが、1970年代に入ってから研究で、その効果の限界も次第に明らかになってきた。つまり、「プッシュ要因」－「プル要因」の枠組みでは説明しきれない移住意思の決定がむしろ多いことが実証研究の積み重ねによって明らかになったのである。特に家族・親族要因が移住動機に介入してくるケースが多く見られるとの注目すべき指摘がなされている（古屋野正伍編著『アジア移民の社会学的研究』アカデミア出版会、1982年、17頁）。移民の本格的な理論的研究としては、次の文献が詳細な分析を提示している。Robin Cohen (ed.), *Theories of Migration*, Edward Elgar Publishing Limited, 1996.

²³ヴァンクーヴァー暴動については、次の文献を参照。飯野正子・高村宏子共著「ヴァンクーヴァー暴動に関する一考察」『津田塾大学紀要』第13号、1981年3月。飯野正子著『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年。

²⁴ルミュー協約については、次の文献を参照。飯野正子・高村宏子共著「ヴァンクーヴァー暴動からルミュー協約へー日加間の交渉とアメリカ政府の働きかけ」『津田塾大学紀要』第14号、1982年3月。飯野正子・今井輝子・高村宏子共著「ルミュー協約成立後のカナダにおける日系人問題」『津田塾大学紀要』第15号、1983年3月。飯野正子著『日系カナダ人の歴史』前掲書。

²⁵吉田忠雄著『カナダ日系移民の軌跡』前掲書、141－142頁。

²⁶マツヨ・モリヤマに対する筆者によるインタビューより。

²⁷工藤美代子著『写婚妻』前掲書、156頁。

- ²⁸同上書、149頁。
- ²⁹筆者によるマツヨ・モリヤマへのインタビューより。
- ³⁰David Iwaasa, *op. cit.*, pp. 31-32.
- ³¹河村勇哲著『カナダ・アルバタ州カウボーイソングの里』同朋社（京都）、1988年。
- ³²William L. Mackenzie King, *Report of the Royal Commission Appointed to Inquire into the Methods by which Oriental Labourers have been Induced to Come to Canada*, Ottawa: Government Printing Bureau, 1908, p. 32.
- ³³*Lethbridge Daily Herald*, August 1, 1908.
- ³⁴*Ibid.*, November 12, 1908.
- ³⁵沖縄出身の伊禮次郎がハーデヴィルのガルト炭鉱に来たのは1909年であった。彼は当初排斥や人種の差別を受けたが、その勤勉さと人間的魅力によって支配人の歓心を買ひ、鉱夫たちの間でも次第に信用されるに至った。ハーデヴィルの炭鉱労働者に沖縄出身者が多いのは伊禮次郎の力によるところが大きい。
- ³⁶David Iwaasa, *op. cit.*, p. 9.
- ³⁷*Lethbridge News*, April 21, 1904.
- ³⁸中山訊四郎編、前掲書、503頁。
- ³⁹同上書、504-505頁。
- ⁴⁰工藤美代子著『黄色い兵士達—第一次大戦日系カナダ義勇兵の記録—』前掲書、72-73頁。
- ⁴¹伊藤一男著『北米百年桜』北米百年桜実行委員会、1969年、153頁。
- ⁴²「精神的方面に於ては或いは出征義勇兵を出して、レーモンド出征の先駆となり、愛国的精神を鼓舞せること多大なりしを以て、当地出征義勇兵杉本吉松氏の仏国戦場に於て戦死せる悲報の達するや、レーモンド官民は挙りて追弔の式典に列し、尚有志の金を以てその墳墓を建て、永久にその義勇を表彰するに至りぬ。」（中山訊四郎編、前掲書、510頁）
- ⁴³レイモンド仏教会編『レイモンド仏教会史（1929年～1969年）』同朋社（京都）、1970年、18頁。
- ⁴⁴デイヴィッド・イワササ氏から伺ったところによれば、日本人協会とそれに続く仏教会の創設にあたり中心的な役割を果たし、レイモンド日系社会のリーダー的存在であった岩浅享淳は、その後仏教徒からモルモン教徒に改宗しており、9人の子供のうち8人がモルモン教の宣教師として日本に来ている。また岩浅氏の妻伊都は同氏と同郷の広島県出身でいとこ同士であり、写真結婚によって結ばれたとのことである。
- ⁴⁵大陸日報社編『加奈陀在留同胞発展史第三』前掲書、60-62頁。佐々木敏二「カナダ日本人会の民主化と河相領事による干涉」（英文）『キリスト教社会問題研究』42号、同志社大学人文科学研究所（1992年7月）63-90頁。
- ⁴⁶大陸日報記者、長田正平の『加奈陀の魔窟』はカナダ内陸部に点在する邦人経営の娼館（売春宿）についてのルポルタージュである。同書によれば南アルバータにはかなりの数の娼館があったらしく、同書にはこれらの娼館に関する詳細な記述がみられる。なかでもとりわけ興味を引かれるのは、レスブリッジにあった一軒の娼館が日本人によって経営されていたという事実である。「レスブリッジは魔窟一軒きりで、是は布田が開いたのである。家作も布田の所有だ。目下は山本忠蔵という醜漢の連れたる娼婦と田島のお花と云うのが居る」（大陸日報社編『加奈陀の魔窟』大陸日報社、1910年、59頁）。カナダの日系人娼婦たちの足跡を追ったルポルタージュについては次の文献がある。工藤美代子著『写婚妻』前掲書。工藤美代子著『カナダ遊妓楼に降る雪は』晶文社、1983年。工藤美代子著『哀しい目つきの漂流者』集英社、1991年。
- ⁴⁷David Iwaasa, *op. cit.*, p. 34.
- ⁴⁸*Ibid.*, p. 10.
- ⁴⁹*Ibid.*, p. 35.
- ⁵⁰*Ibid.*, pp. 37-38.
- ⁵¹中山訊四郎編『加奈陀之寶庫』前掲書、502-511頁。
- ⁵²レイモンド仏教会編『レイモンド仏教会史（1929年～1969年）』前掲書、20頁。
- ⁵³モルモン教会旧会堂および敷地のレイモンド仏教会への譲渡が正式に決定した際に撮られた記念写真に

は、日本人協会を代表する日系人のほかにレイモンド町長をはじめとするレイモンドの名士たちが顔を連ねている。David Iwaasa, op. cit., pp. 40-41.

54 レイモンド仏教会編『レイモンド仏教会史（1929年～1969年）』前掲書、23頁。

55 河村勇哲著『カナダ・アルバタ州カウボーイソングの里』前掲書。

56 同上書、5頁。

57 カナダ最初の日本人学校「共立日本国民学校」はヴァンクーヴァーにあったリトル・トウキョウのアレキサンダー街439番地に1906年に開設されている。この日本人学校の前身は1902年に開設された「日英学院」である。当時のカナダ在留の日系人は大部分が出稼ぎ人であって、当初からカナダに永住する意思はもっていなかった。つまり一儲けしたらいずれ日本に帰るつもりでいるから、子どもの教育についても日本人としての教育を望んだのはある意味で当然であった。日本人児童に日本語を教え、それと並行して公立学校に入学する児童のために英語の素養を与えることがその教育目標であった。しかしながら、年数が経ち子どもも成長して大きくなるにつれて次第に永住の決心をせざるをえなくなる。こうなると子どもの教育もカナダ国民としての教育に次第に傾いていくのは理の当然であろう。こうして「日本語主体の日本人としての教育」（日主英従）から「英語主体のカナダ人としての教育」（英主日従）へと重点が移動していったのである。このような日系人社会の要請に応えるべく、1920年には「晩香坡日本共立語学校」がスタートしている。（佐藤伝編『晩香坡日本共立語学校沿革史』晩香坡日本共立語学校維持会、1954年、を参照）